

あすを拓く

障がい者が成長することにより、真っ赤なりんごに実る。そして、何本にもなって農園になるようにという想いを込めてつけた「アップルファーム」。今、たくさんの真っ赤なりんごが実りはじめている。



株式会社アップルファーム
代表取締役
渡部 哲也さん

プロフィール
1968年宮城県多賀城市生まれ。1988年東北学院高校を卒業し、2000年にミルナーカレッジオーストリア卒業。2011年より、株式会社アップルファーム設立。現在に至る

2人の障がい者との出会い 人生のテーマが見つかる転機に

渡部社長が障がい者福祉について考え始めたのは、義理の弟が交通事故にあったことがきっかけだった。重度の脳障がいがあり、感情のコントロールができなくなった。年老いた77歳の親が面倒をみなくてはならないという現実。「いずれ義弟は、母親が亡くなった後から自身自身で食べていかなくてははいけなくなる。自分に何かできないか」。その時「障がい者が自立できる環境を作る」という大きな人生のテーマが漠然と浮かんできた。

その後、たい焼き屋を始めた時、運命的な2人目の障がい者に出会った。縁あって発達障がいの青年を雇ったことが大きな転機となった。

青年の対応には困った。たい焼きを手づかみで渡そうとしたり、レジに立てばお客様とトラブルを起こす。最初はとても働ける状態ではなかったという。

「そんなある日、彼がたい焼きを焼くことに興味を持っていることに気づいたので。そこでたい焼きを焼く作業を任せてみると、驚くことに問題行動がなくなってきたのです」と渡部社長はその当時を振り返る。

「適材適所」。環境によって人はこれほど変化、成長するのかもしれない。利益は後からついてくると気付きました。価値観が

株式会社アップルファーム

食を中心に5拠点で事業を展開し、障がい者雇用を力に注いできた企業。震災後、より厳しい雇用環境にある被災地の障がい者に対し、就労機会の提供を目指す

所在地
仙台市若林区六丁目字南 97-3e
環境仙台ビル 1F
Tel 022-390-1101
Fax 022-390-1102

丁寧で質の高い料理の評判は口コミで広がっていて、オープンと同時に満席となる



お店の前では新鮮な野菜の販売 約50~60種類のメニューには家庭料理が多く、緑と陽光があふれる店内。清潔感溢れる店内にはお客様の笑顔が輝いている

「〇〇さん家のごぼう炒め」などユニークなものも

180度変わりました

障がい者福祉と飲食店との融合という発想。渡部社長の新しい取り組みが始まった。障がい者が楽しく働くことができる職場そんな想いからできたビュッフェレストラン

強い志のもと2010年11月にオープンした「六丁目農園」。周りの人からは、「うまくいくはずが無い」「立地が悪い」とさんざん言われたが、渡部社長には成功するイメージがあった。

障がい者の多くは、接客が得意ではない。ビュッフェレストランであれば、必要最低限の接客で対応することができる。料金も決まっているので、会計も手間がかからない。

「障がい者は、1つのことに熱中し極めようとする職人気質があります。自分たちのペースで仕事に集中でき、彼らの能力を活かせると思えました」

店の自慢は、石窯で焼く本格ナポリピザ。鯛焼き屋からのつきあいである障がい者スタッフもいまや一流のピザ職人として腕をふるっている。

野菜を切るときはスライサーなどの機械を使わず、すべて手切り。大きさや厚さは不揃いになるが、1つ1つ手間暇かけて作っているということが口コミで広がり、今では、毎日予約で一杯の状況になっている。

「障がい者は自分に価値が無いと思っていたり、従業員から必要とされたりすると、従業員から必要とされたりすると、

店内に置かれた水耕栽培プランター、そして彩りも鮮やかに並ぶ60種もの手作り惣菜。連日大盛況を見せる自然派ビュッフェレストラン「六丁目農園」1号店だ。「障がい者が再び自立を実現する、自分の仕事はまさに『再生』ビジネスだと思っています」と株式会社アップルファームの渡部哲也社長は語る。

総勢40名のスタッフの大半を障がい者が占め、調理、盛り付け、配膳に生き生きと働く。新鮮野菜の滋味と手間隙かけた料理の味が口コミやインターネットを通じて広がり、「今最も予約をとりにくいレストランの1つ」といわれている。



障がい者が楽しく働くことができる職場を作りたい、という想いが伝わってくる「六丁目農園」。大切な仲間とともに、やり甲斐とプライドを持って働ける環境がここにある

ぐーっと伸びるんです

事業としてきちんと収益を上げていくからこそ、業界平均支給額を大きく上回る給料をスタッフに支給できているという。障がい者に、納税者になってもらうというビジョンが達成されつつある。

生かされていることに感謝して 新しい福祉事業に携わりたい

東日本大震災当日は津波が1メートルまで迫った。入居しているビルの自家発電が稼働していたことから、多くの人が避難してきた。「六丁目農園」は通常営業こそできなかつたものの、おにぎりや軽食を作り、被災した方々に提供した。障がいのあるスタッフも一生懸命働いた。ようやく営業を再開できたのは、1カ月後だった。

「人の役に立つ」ということは、障がいの有無に関係なく、人の喜びや自信に繋がる。誰かの役に立つことができるという自信を身に付けるきっかけになる。「生かされているな、と感謝しましたね。そして生かされた者の責任があるはずだと強く感じました」

渡部社長はレストランという形だけでなく、広く障がい者福祉事業を展開していきたいと考えている。現在、福祉事業のコンサルティング・講演などの仕事が増えてきているという。

「自分の理念を信じてやり続けると道が拓けます。これからも人の可能性を信じて頑張っていこうと思っています」